

はじめに-30年ぶりの新発見-

上里町立郷土資料館では、発掘調査や展示会等の運営のほか、地域の文化財の調査も行っています。今年度は調査によって、大字帯刀（たてわき）の宿（しゅく）という地区の民家から南北朝時代から戦国時代にかけて作られた「板碑（いたび）」と「五輪塔（ごりんとう）」が発見されました。

町内での板碑と五輪塔の発見は、約30年ぶりになります。今回はこの調査についてリポートしたいと思います。

板碑・五輪塔とは？

板碑と五輪塔は、いずれも仏教思想に基づいて作られた石碑の一種です（図1）。板碑は、板状にカットした岩石に「種子」（しゅじ：梵字（古代インドの文字）を用いて仏を表現したもの。）を刻んだものです。また、五輪塔は、「空輪」、「風輪」、「火輪」、「水輪」、「地輪」の5つの部位をそれぞれ石で作り、積み上げたものです。どちらも今から800年～400年前の鎌倉～戦国時代にかけて、武士等の有力者の墓石や供養塔として作られたものです。町内ではこれまで、350点以上の板碑と五輪塔が見つかっています。

この時代は、戦乱や飢饉が続いた非常に不安定な時期であり、人々は仏教に救いを求め、これらを作ったと考えられています。

調査でわかったこと

調査を行ったのは、2021年8月です。所有者の方にご協力を頂き調査を実施することができました。

その結果、板碑1点、五輪塔11点（空風輪4点、火輪4点、水輪2点、地輪1点）の計12点が発見されました。このうち、板碑は壊れ、破片の状態でしたが、阿弥陀如来（あみだによらい）、観音菩薩（かんのんぼさつ）及び勢至菩薩（せいしばさつ）を意味する種子がそれぞれ刻まれており、阿弥陀三尊を表したものであることが判明しました。また、種子の形から、この板碑が南北朝時代～室町時代の初めごろに作られたものであると考えられます。

五輪塔についても、完全な形を保ったものではありませんでしたが、残った部分の特徴から室町時代から戦国時代に造られたものであることが判明しました。また、風空輪と火輪がそれぞれ4点見つかったため、かつて、この場所に4組の五輪塔が存在した可能性が考えられます。

おわりに -調査結果からわかること-

石塔が見つかった大字帯刀の宿地区では、江戸時代以前の資料がこれまで発見されておらず、この地域の歴史は謎に包まれていました。今回、板碑と五輪塔が発見されたことにより、地区の歴史が室町・戦国時代までに、大幅に遡れる可能性が出てきました。今後、地区の成り立ちを考える上で重要なヒントになりそうです。詳しい調査結果については、令和3年12月10日刊行の町立郷土資料館『研究紀要』第20号に掲載しています。町立図書館等で閲覧できますので、一度手に取ってみてください。

（郷土資料館 文化財係 林 作成）



写真1：発見時の板碑と五輪塔

右端で横倒しにされているのが板碑（矢印）、その上が江戸時代に作られた祠の一部、それ以外が五輪塔です。みなさんの足元にも新発見が眠っているかも、、、



写真2：調査中の板碑

はじめは汚れていましたが、洗浄しコケや泥を落とすと、きれいな緑色をした板碑であったことが判明しました。



写真3：発見された五輪塔

空風輪（五輪塔の最上部）です。4点発見されているため、本来は4組以上の五輪塔があったと考えられます。



図1：板碑と五輪塔の形態と名称

【参考文献】

外尾常人ほか『上里町板石塔婆調査報告書』上里町教育委員会 1989年
上里町史編集専門委員会編『上里町史』資料編第二編 上里町 1992年
中村 元『仏教語大辞典』縮刷版 東京書籍 1981年